

## 主張

# 教師の自立的な成長を期待して

森田 聖 吾



北海道中学校長会は、令和五年度の活動の重点に、「子供を主語にした教育活動」の推進を掲げ、一人一人の生徒が「何を学び、何ができるようになったのかを自覚し、自分のよさの認識、新たな気付きや問いにつながる」子供が自己調整しながら学びを深める、自立した学習者の育成を「オール北海道」で目指してきました。

この学びの実現にあたっては、これまで情報提供者としての役割が大きかった教師の授業スタイルから、これからは生徒の学びの伴走者として、子供が目を輝かせて「なるほど分かった」「学ぶことは楽しい」「もっと学びたい」など、子供たちが前のめりになる、ICTを有効に活用した主体的・対話的で深い学びへの授業改善が必要となります。

いつの時代も学校教育の成否は、教員の力量にかかっています。私も校長は、教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教員が教職生涯を通じて、探究心をもちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出すことができる教員へと成長する、そんな学校を創造していくことが求められています。

さて、コロナ禍の三年間は、教員の研修スタイルを急速に変化させました。例えば、各教科の授業動画や、不登校生徒への対応に関わる動画など、教員の研修ツールが充実しました。いつでも、どの場所からも学べるという意味ではとても便利になりましたが、講師



の説明をオンラインで数多く視聴すれば、授業力や生徒指導力が高まるかと申しますと、そう順調にはいかず、学んだ知識が指導場面で生かし切れないことが多々あります。

新たな研修制度が始まったこの時期だからこそ、教室の中でリアルに展開される教員の指導や生徒との関わりなど、一人一人の子供を見ての個別最適な学びや、学習集団の状況に応じての協働的な学び、その質の在り方をどのように高めていけるか、そういったことを教員同士が「学び合う」研修を大切にしていかねばならないと強く思います。

今年はコロナの5類移行ということもあり、校内での授業研究や、市区町村、都道府県規模で授業を参観しての研究大会をようやく開催できました。研究協議の場面では、「子供や学級のリアルな変容を踏まえて、「授業力」や「子供理解力」、さらには、「ICTを活用した指導」や「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について熱心に話し合われたことと思います。そのような場での学校を超えた教員との対話や実践交流などの協働的な学びを通じて、自らの教育実践を振り返ることにより、授業改善につながる気付きや、自立的に成長するためのモチベーションの高まりが期待できます。

結びに、地動説で著名なイタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイは「人にものを教えることはできない。自ら気付く手助けができるだけだ」という言葉を残していますが、この意味するところを、校長は対話に基づく受講奨励の際に大切にしていかねばなりません。

校長は、若手からベテランまで全ての教員にとって学びのモデルです。校長自身がどう学んでいるか、その行動がモデルになりますので、自立した学習者であり続けたいです。

(全日中副会長・北海道旭川市立忠和中学校長)